

智頭往来

文化庁選定「歴史の道百選」
行ってみて歩いてみたい「遊歩百選」選定
日本の百力所

「夢街道ルネサンス」モデル地区

ち
づ
お
う
ら
い

鳥取県八頭郡智頭町
市瀬地内〜志戸坂峠付近

歩いてみて、ふれる歴史の道



「往来の名称と概要」鳥取城下を出発して、千代川つたいに河原・用瀬・智頭を経て志戸坂峠を越える道は、峠までの里程十里八町四十九間(約四十二km)と「因幡誌」は記している。参勤交代の大名行列が旅をする場合、鳥取を出て智頭で泊し、峠を越すには一日半ほどの行程であった。志戸坂峠を越えて大原(岡山県)・佐用(兵庫県)から姫路に通じ、大阪・京都への主要道であったから近世には「上方往来」又は「京街道」とか、岡山県側では「因幡街道」など多くの呼び名があった。明治以降の書物は、この道を「智頭街道」・「智頭往来」としており、「鳥取県歴史の道調査報告書第一集」では「智頭往来」としている。享保十一年(1726)、佐藤長通が調査した「因幡国大道筋里数」によると、道幅は今日に比較して非常に狭く、最大で六m。鳥取から遠ざかるにつれて狭まり、八上郡に入ると約四五m、高津原(河原町)以南では約二・七m、智頭宿以南は約一mの広さであった。平成八年文化庁によって「歴史の道百選」に選定された区間は、智頭町大字市瀬「篠ヶホキ」から岡山県英田郡西栗倉村板根まで、志戸坂峠越えの古道約二十一kmである。

凡 例

- 智頭往来ルート
- 国道53・373号線
- 県道・町道ほか
- 千代川等の河川
- 鉄道線路

●地図上、(一)から(六)の解説は、裏面と照らし合わせてご覧ください。



備前街道との分岐点に立つ道標(智頭宿)

智頭往来

因幡・美作国境の志戸坂峠を越える道は、奈良時代以前から、畿内と因幡地方を結ぶ主要な道でした。近世に至って鳥取藩は江戸幕府にならぬ、宿駅を定め、智頭往来を重視しました。それはこの道が参勤交代の道であったからです。鳥取藩では初代藩主池田光仲が慶安元年(1648)に正式に初入り国してより、十二代池田慶徳に至る二百十四年間に、百七十八回往復しています。参勤交代は鳥取出発の場合、智頭宿に泊り、二日めは駒帰・大原を経て平福(兵庫県佐用町)泊りでした。

智頭往来は、近世までは上方への主要道として重要な位置を保ち続けましたが、明治になると政府と県は智頭往来に代わって、京・大阪に近い若桜の戸倉越えの道を重視し始め、この街道は重要性を次第に低下させていきました。その間、智頭往来は明治十九年の大改修によって道筋が大きく変わり、昭和四十年代の国道昇格によってさらに改修されていきましたが、昔の面影を残す往来は次の六か所に見られます。



智頭宿「石谷家住宅」
国登録有形文化財、
智頭町指定文化財

忘れられています。往時は往來の智頭宿入り口であったことを物語っています。

【智頭宿】 ちづじゆく
智頭宿の町並みの形態は往時の状態をよく伝えています。歴史的景観も部分的に確認でき、また、参勤交代の際の宿所であった御本陣跡・下ノ茶屋跡や、備前街道との分岐点に立つ道標などが当時を偲ばせています。

【篠ヶホキと市瀬付近】 市瀬地内
智頭往来は智頭トンネル入口より右に抜けて、道端に祀られている一体の地藏さんの西側を、谷川に添って斜面を登ります。

往來は、御立山の中腹を巡って約一km、千代川からの高さは最高で約八十m。藩が崩壊防止に植えた樅の大木も数本残り、昔ながらの情景を味わいながら十五分ほど歩くと、市瀬集落の茶屋土居に下りてきます。

【篠坂】 しのが
往來は、篠坂集落手前の切通岩付近で、国道の拡張のため跡切れていますが、その先から再び姿を現し、集落内を抜けています。篠坂神社の森の上に広がる畑の上を通過して行くと、杉林の中に「タワンドウ」と呼ぶ「札ノ堂」があります。現在、堂は無く地藏さんが寂しく立っています。

ここから杉林の中を下って、毛谷のどうだんつじ公園の上に出ます。往來は、この辺りから向こう岸の酒清水に架かる橋を渡ったようです。



【樽見】 たるみ
本谷川沿いの、狭い山際に美しく積まれた石垣の上に並んだ民家があります。その下の道を通って、奥の家の前に行くと、「因府上京海道記」に、「此処三絶景アリ、紅葉シゲリテ、石ノクミ(組)ヨウ、水ノ流ルルカタチ、二ツ橋カカリタル体、作りタル庭ノ如シ」と絶賛されている。俗に「魚ノ棚」と呼ぶ所があります。二百七十年経った今も、その風景は変わっていません。

林道入り口の樽見橋状に至ると、国道との分岐点に祀られている地藏さんの上辺りから副ヶ瀧回りまで、往來の古道が二百mほど、当時の状態をよく留めています。

【中原】 なかばら
智頭往来は、小見原からは現在の国道373号線とはほぼ同じルートを通ったようです。中原の国道より外れて右側の小高い岡田に上る道が往來の道です。上り切ると田んぼの先の大きな木の根本に宝篋印塔と五輪塔を祀る祠が見えます。昔、因幡守護山名氏の家臣であった医師岡田宗庵の墓と伝えられています。

中原観音堂は、元禄三年(1690)に再建された古刹で、地域の人々のみならず、往來を行き交う旅人も参詣し、ご加護を祈りました。

【志戸坂峠】 しとさかとらげ
この峠は古代「鹿跡御坂」、元禄時代の美作国絵図では「志戸坂峠」と記載され、因幡では「人見峠」あるいは「人坂峠」、俗に駒帰坂と呼ばれたようです。「時範記」によると、速く平安時代の承徳三年(1099)二月十五日、坂根を早朝出発した因幡国の守平時範が故事に従い「境迎え」の儀式を行った峠です。

戦乱の中世には、山名・赤松・尼子・毛利・草刈や、また羽柴秀吉らの軍勢が往來したことでしょう。徳川時代は特に参勤交代で、鳥取藩主一行の行列が度々通りました。また、一般の旅人はもちろん、山陰山陽の物資・商人の行き交う峠でありました。

【坂根】 さかね
岡山県英田郡西粟倉村坂根、ここは峠の麓に位置した交通の要所で、物資輸送の間屋も置かれた宿場でした。現在も上り坂沿いに軒を並べた、峠の宿場らしい名残が見られます。集落の外れから細い谷になり、峠道は急な登り坂になり、三十三曲がりともいわれました。

明治年間に大改修されて、道幅は広くなり、側壁はきれいな石垣が積まれています。それでも昔は大変な難所であったに違いありません。「因幡誌」は「難所ニテ、大雪ニ牛馬通ラス」と伝え、作州側では「因幡通いすりや、吹雪が降りかかる。帰りや妻子が泣きかかる」と唄われました。

【副山・副ヶ瀧】 そつやまそつがたき
国道の富田橋の下手川向こうが副山で、二つの峰の間から垂れる僅かな水量の瀧を「副ヶ瀧」と呼びます。「因府上京海道記」は「右谷川ヲ越シテ向ノ山ニ、二ツ副ヶ瀧是因幡名所ノ其一ツナリ。ツツシ二面ニ咲ナリ」と伝えています。

また「因幡民談記」・「因幡誌」は、この名所を詠んだ古歌数首を紹介しています。旅人が都に早く上りたい心情を詠んだ一首が、歌碑となって瀧の正面に建立されています。

【関屋】 せきやど
関屋は、天正のはじめ毛利の支配下にあったとき、この所に関所を設け、往來人を改めました。またその後、羽柴秀吉もこの所に兵を置いたといわれます。「昔から本名を岩崎坂と云ったが、俗に関屋坂と云うのはそういう訳である。」と「因幡誌」は伝えています。

現在、関屋跡には地藏・廻国碑・大日如来碑が置か

【志戸坂峠付近】
峠の山頂には、かつての志戸坂峠の宿場跡と、大日如来の御坐所と云うのが見られます。また、志戸坂峠の山頂には、かつての志戸坂峠の宿場跡と、大日如来の御坐所と云うのが見られます。

【志戸坂峠付近】
志戸坂峠の山頂には、かつての志戸坂峠の宿場跡と、大日如来の御坐所と云うのが見られます。また、志戸坂峠の山頂には、かつての志戸坂峠の宿場跡と、大日如来の御坐所と云うのが見られます。



志戸坂峠付近

【駒帰】 こまがえり
「佐治谷は余戸(佐治村)の山内与四郎左衛門の名馬も、越えることが出来ず引き返したから「駒帰」と言う。」との説話も残る駒帰は、因幡国境の最奥の宿場村でした。藩主の休憩所であった御茶屋跡や、村人たちが跪いてお迎えした「土下座場」という所など、江戸時代の名残りを偲ぶ遺跡が数多く見られます。

【駒帰地内】
駒帰地内には、かつての駒帰の宿場跡と、大日如来の御坐所と云うのが見られます。また、駒帰の宿場跡と、大日如来の御坐所と云うのが見られます。

志戸坂峠付近